

研究課題名	【Web 会議番号 2019_10】 花粉-食物アレルギー症候群に対するシラカバ花粉免疫療法の有効性と安全性の検証
フリガナ	ツマガリ シュンタロウ
代表者名	津曲 俊太郎
所属機関 (機関名) (役職名)	神奈川県立こども医療センター アレルギー科 医長
本助成金による発表論文, 学会発表	<ul style="list-style-type: none"> ・ KAAACI-KAPARD-WPAS-INTERASMA Joint Congress 2019.5.10-11 ソウル 「 Evaluation of the dose effect of birch pollen-based subcutaneous immunotherapy for apple allergy. 」 ・ 第 68 回日本アレルギー学会学術大会 2019.6.14-16 東京 「花粉-食物アレルギー症候群に対するシラカバ花粉皮下免疫療法におけるアレルギー投与量の検討」

研究結果要約

カバノキ花粉などによって誘発される花粉-食物アレルギー症候群(pollen-food allergy syndrome; PFAS)では、果物摂取に伴う口腔内症状を呈し、患者数も増加している。花粉抗原を用いたアレルギー免疫療法で PFAS の改善も期待できると理論的には考えられるが、治療効果はまだ明らかではない。さらに、治療効果の長期予後も明確でない。我々は先行研究でシラカバ花粉皮下免疫療法の 1 年後における有効性を報告したが、本研究ではその長期的な予後因子を探索し、特にアレルギー維持投与量と臨床症状の改善および免疫学的パラメータとの関連性について評価することでより適切な治療プロトコルを確立することを目的とした。

本助成研究期間内に 20 名の患者について治療開始 2 年経過時点での評価を行った。アレルギー投与量により高用量群(1:200 w/v 0.15ml 以上)8 名と低用量群(1:200 w/v 0.15ml 未満)12 名の 2 群で比較検討した。臨床症状の変化は両群で差は認めなかったが、シラカバ花粉およびリンゴの特異的 IgG4 値は高用量群のほうが高い傾向を示した。このことは、アレルギー免疫療法において主な IgE 阻害因子として作用すると考えられている特異的 IgG4 抗体が高用量で治療したほうがより有効に産生されることを示唆しており、免疫学的には 1:200 w/v 0.15ml 以上がアレルギー投与量として適切であると考えられた。